

自問教育の会



EOSA Education of Self-Asking

発行日：2016（平成28）年4月29日 No.8

発行者：自問教育の会（会長：小林慎一）

編集：自問教育の会事務局（丸山 斉藤 白澤 吉川 牧 新津 北村 松島 市川 片岡）

事務局：長野県塩尻市大字大小屋61番地 塩尻市立塩尻中学校内 丸山博

連絡先：TEL0263-52-7852 FAX0263-51-1600

URL：<http://jimon.3zoku.com/>

問い合わせ先：<http://jimon.3zoku.com/php/sformmail.html>

第23回全国自問教育の会の報告

研究テーマ

『友達の作文を読み物資料とし、自己を深く見つめ直す学習を求めて』

～毎日の自問清掃の取り組みを通して～

平成二年
竹内隆夫先生の年賀状

以毛相馬、以言挙人。
毛並みがよかつたり弁
が立ちさえすれば登用
される政界ではふがい
ない。学校も人間のみ
に与えられた情操や創
造性をないがしろに
し、テストの点数だけ
で評価しては、登
校拒否四万人も当然。



全国学力学習状況調査の結果の分析とそれによる指導が県レベルで緻密に行われている長野県の現状を竹内先生がご覧になったら、何とおっしゃるだろう。今回の指導案の表紙に掲載させていただいた年賀状は、現在の学校教育の現状に大きな示唆を与えているように思えて仕方ありません。

さて、今回の第23回の全国自問教育の会は、久しぶりに会場を小学校に移して開催されました。長野県茅野市立湖東小学校の6年生の清掃の様子や道徳の時間の授業の様子

を参観し、研究会を行いました。また、2日間にわたって、全国各地からお越しの先生方による実践報告が行われました。2日間を通して、深く思考を巡らす充実した内容になったように思います。遠路はるばる湖東の地にお越しいただき、感謝の気持ちでいっぱいです。

【1日目】

○清掃参観

・清掃前の話 6学年主任 片岡 聡矢

○道徳の時間授業公開

・主題名「やる気はどこから」
指導者 自問教育の会理事 平田 治
授業者 6年1組担任 片岡 聡矢

○授業研究会

司会 茅野市立湖東小学校職員 佐久 清仁

○開会行事

全体司会 自問教育の会事務局長 丸山 博
開会の挨拶 自問教育の会会長 小林 慎一
会場校挨拶 茅野市立湖東小学校長 大石 順子

○実践交流会Ⅰ

司会 自問教育の会事務局 白澤 朗生

○情報交換会(呉竹鮎)

【2日目】

全体司会 自問教育の会理事 平田 治

○講話Ⅰ

講師 塩尻市立片丘小学校長 小林 正幸

○実践交流会Ⅱ

司会 自問教育の会事務局 新津 由紀

○講話Ⅱ

講師 フリーライター 山本 健治

○実践交流Ⅲ

司会 自問教育の会事務局長 丸山 博

○閉会行事

閉会の挨拶 自問教育の会会長 小林 慎一



授業公開 道徳の時間「やる気はどこから」

【授業者より一言】

「やる気は、出そうと思って出るものではなく、自然と心の中にわいてくるものだ」と自問ノートに書く子がいます。そのような子どもの意識の中で、1人の男の子の自問ノートを取り上げて、「あの〇〇くんは何でそうじをこんなにやっているんだろう？」と子どもに問いかけました。クラスみんなが1人の自問ノートの記述を温かく受け止め、そして率直な感想を多くの子が語り、伝え合えたことにこのクラスの成長を感じることができました。授業後、「感動しました」と何人かの先生に声をかけていただきました。まだまだ課題もあるのですが、そのように受け止めていただいたことに、ただただ感謝の思いでいっぱいです。遠路より参観いただきありがとうございました。

講話Ⅰ

講師 小林 正幸先生

(長野県塩尻市立片丘小学校長)

演題『本物の教育を求めて

～自問清掃との出会い～』

自己の挫折を機に自問清掃と向き合い取り組むことで、教師として人間として成長していった軌跡をお話いただきました。心に浸みる素晴らしいお話を伺うことができました。

講話Ⅱ

講師 山本 健治先生

(大阪府 フリーライター)

演題『なぜ掃除を始めたか。

掃除して何を学んだか』

駅前を清掃し始めて30年。清掃活動をひたすらに続けた人にしか得ることのできない体験を元にお話いただきました。山本先生の中の自己変革についてのお話を伺い、感動せずにはいられませんでした。

実践発表一覧(発表順不同)

「女鳥羽中学校の自問の紹介」

～振り返りについて～

長野県松本市立女鳥羽中学校 小日向里美

「生徒たちに自主性を育てたい」

長野県塩尻市立塩尻中学校 丸山 博

飯田 大輔

楠田美由紀

宮川 幸浩

「自問清掃について」

愛知県高浜市立高浜中学校 森田 康行

自問清掃によって見えた子どもの育ち

長野県北相木村立北相木小学校 新津 由紀

市川 裕太

「自主的・実践的態度を育てる

“気づきの活動”と意識付けを図る授業の工夫」

愛知県日進市立香具山小学校 川上 淳

「会田中学校の自問清掃の取り組みについて」

長野県松本市立会田中学校 松島 裕

藤原 賢志

「自問教育(清掃)と自分自身の成長」

長野県長野市立豊野東小学校 栗原 英治

実践報告

石川県野々市市立野々市中学校 堀 祐己

黒田 拓麻

岡山県岡山市立妹尾中学校 豊岡恵梨子

愛媛県西条市立西条小学校 小野 基美

静岡県静岡市立富士見小学校 小笠原寿彦

松尾拳史郎

千葉県ハピレット社長 日吉 慎一

参加者の感想より

○子どもの主体性をいかに育てるか、伸ばすか、そのために教師自身がまずは主体性を伸ばしていかなければならない、また、そこに打算があってもよくないということ、教育の根幹に関わるところで、今日は改めて強く考えさせられました。

○授業のあたたかさに驚き、児童のすごさに驚き、先生方の助言も多くいただくことができ、大変充実した時間を過ごすことができました。

○清掃、自問という活動を通して「生徒につけたい力」をつけるために、「教師がどう変わるか」ということを考えさせられました。個々で刺激を受けたことを学校へ帰って還元したい。

実践の中で

自らを高める自問教育



竹内隆夫先生

の手引き

新たな発想による清掃活動

一人としての成長を願って

竹内 隆夫 著

<目次>

すいせんの言葉(第4号掲載)

1. 実践の場こそ(第4号掲載)
2. 紆余曲折を経て(第5号掲載)
3. 自由とは迷惑をかけないこと“人の痛みがわかる”(第6号掲載)
4. 心を汲む気働き“人の心がかくめる”(第7号掲載)
5. 創造と発見“人のねうちがわかる”(第8号掲載)
6. 感謝の心で自分との違いか許せる”
7. 正直ということ“胸に自分なりの尺度ができる”
8. 教師のあり方
9. 理念の背景

あとがき

(まとめて読みたい方は、事務局までお問い合わせください)

5 創造と発見

こうして仕事の効率があがると、15分でもまだ多少時間が余るのです。そこで余った時間をどうするか—これが次の課題となります。つまり第3段階の動機づけに入ります。

たとえ残りわずか数分でも終了のチャイムまで清掃以外の仕事で何かためになる事がないか

見つけることにしました。これまでは早く終われば時間が余っていても片付けたのですが、時間いっぱい静けさを保ちたいと考えました。そして新しく見つけようと努めるたびに創造性の細胞を刺激し、それだけ創造力が発達するからです。講話では、

「ノーベル賞の第1回の受賞者をレントゲンさんと言いますが、この人は人体の中を透かして通る光を発見して、体内の病気の発見に貢献し

たということで最初にこの荣誉ある賞を授けられ、今もレントゲン写真と呼ばれ、その名をとどめています。

“あなたこそ世界中の人類の最大の恩人です”とほめられたとき、彼は答えました。“私はそんなにほめられる仕事をしたつもりはなかったのです。ただ小さい時から新しいことを見つけることが好きだったので偶然に見つかっただけなのです”と謙遜して答えています。

創造性という能力は人間だけに授けられたもので、人類が立派な文明を築くことのできた原動力です。しかしこれに個人差が生ずるのは、後天的に本人の努力いかんで発達するものだからです。そして皆さんの頃に見つけようと努力することで決まるのです。

皆さんは毎日先生から教えてもらうことが多いために、どうしても受け身になりやすく、自分から進んで見つけようと努め、創造力が開発されるようにと考えました。これからは、もう仕事がすんだと思わないで、チャイムが鳴るまで何か見つけることにしようではありませんか」と呼びかけたのです。この話から、また新たな目標が加わり、見つけ清掃などと呼ぶようになりました。

働く喜びふくらむ

一通りの清掃がすんでも、書棚や机をまっすぐに並べ直す者、掲示物を見やすいように貼りかえる者、箒のひもを取り替える者など、子供達の目は生き生きとかがやき、校舎の隅々まで変化が見られるようになりました。あの君があんな汚れまで見つけている、と意外な生徒の努力が認められ、またその子は、「僕もこのクラスにとって必要な存在なのだ」と思うようになりました。こうして存在感も育ち、普段の学習に見られない新しい尺度で友達が見直されもしたのです。

「させられる掃除」から、「する掃除」に変わり、働くことに喜びがふくらんだのも、この段階からでした。

また、これまでは、清掃といえば、主に床の面にあるごみやほこりを除けばよいと思っていたのに、壁や天井の方まで注意力が注がれ始めたのです。庭掃除も、地面のごみや石を除くとか、草取りが主な仕事であったのに、繁りすぎた木の枝おろしや、根元の芝刈りから土運びまで、仕事が見えてきたのです。

その昔、ほとんどが木造校舎であった頃は、先生方も、床の面にのみ異常に神経が注がれていました。「からぶき」と言って各クラスが競って廊下へへばりつき、せっせと廊下の板などを光らせようとしていました。隣のクラスとの境で足が鏡のようによくうつる方が、よく掃除ができているとされました。

そのために家から「おから」や「ぬか袋」を持参させて、木目にこすりつけて光沢を競うという異常さで、みんな、「床が光れば心も光る」などと言って汗を流しました。ぬかをこすりつけて光らせるのと、心が光るのを混同させていました。私はこのような精神主義は取りあげませんでした。

当時はこのように教室を清潔にするというねらいはうすれていましたから、汚れた雑巾のまま腰板のさんを拭くために、壁のへりを黒くしてもさほど気にとめませんでした。この「見つけ清掃」になるとそれも苦になって、壁のしみは別な布でいねいに水洗いするとか、ストーブの煙で汚れた壁のふきとりにも目が利くようになりました。その昔校舎建築をしてくれた棟梁さんが訪れて、「校舎を建てた時の美しさもどってきましたよ」と喜んでくれました。

子供の目が汚れに敏感になると、壁に残る銚やビニールの後、ガラスの汚れ、天井のくもの巣、植木鉢にあるわずかな泥にまで目がとどき、

棚の上のほこりや裏側の汚れまで見つけるので、全く新たな清潔感がただようようになりました。さらに掲示物の配置や目の高さを考えて貼りかえるまでになり、学期末に予定していた大掃除は特に置く必要もなくなったのです。

庭の掃除にも変化が起きました。便所のまわりなど、人のいやがる所へひとりで入り込んで働く者、通路の石を整える者、植えこみの中に入りすぎた芝を除く者、根元の土をやわらかに掘りかえす者、うっかり踏みこめないように石を並べる者など、小さな造園作業にまで発展するのでした。

ここまで目が利いてきますと、いくら時間があってもたりません。新しい仕事に気づいたとたんに関わりのチャイムが鳴るということも珍しくないのです。

例えば花壇のへりに並んでいる石が曲がっていることに気づくと、縄を張って尺度とし、並べ替えるために石を掘り出します。そこでチャイムが鳴ると、見苦しくころがり出したまま、作業は中断しなければなりません。その続きは翌日の清掃の後半となり、未完成のまま何日も続くこととなります。ですから日々の清掃は未完成でよいことにしました。

この場所は数日後には美しく生まれ変わります。生徒の中には先が楽しみで、休み時間にとりかかっていたり、開始のチャイムが待ちきれなくてとりかかる姿も見られました。終わりだけは全校一斉に打ち切り、次の授業などにくいこまないことにしました。

この未完成清掃という発想も新しいので、清掃係が後の様子を点検するようなことは、無用としたのです。

中学生ともなると、創造のスケールも大きく、教師の及ばない発想が現れます。かつての先輩が植えた記念の樹木も、中には教室の採光をさまたげます。枝おろし作業も始まります。雨の

たびに崩れる土手にはどこからか芝草が運ばれて植えられました。雑巾の水を捨てる場所も石を並べて改良されました。おろした太い枝を切りそろえて焼き、玄関わきに小意気な小花壇も生まれました。アイデアは泉のごとく沸き、壁を修理する道具、すのこ板のごみを掘る道具などは、彼らが工夫して作ってくれました。校地のすべてが生徒の創造の教材と化したのでした。特に費用のかかるもののほかはなるべく生徒の発想を生かすようにしました。

給食センターから食缶を運ぶ運転手さんも、「くるたびに学校が生まれ変わるので、この学校へくるのが楽しみです」と言われました。生徒の改善への意欲は校外にも及び、登下校の道路わきの溝をきれいにするグループが現れました。日曜に集まって家庭から持ちよるごみの集積場所を修理するグループも現れました。電車通学の生徒は、無人駅のホームに小花壇を設けました。地域ボランティアが自然に発生し、市長さんから感謝の手紙もいただきました。

家庭生活にも変化が現れ玄関の改良、勉強部屋の工夫などの報告もあり、クラスからはノートの使い方の改善などの報告もありました。感想文にも現れました。

「この清掃をやるまでは、私はこんなにいろいろなことに気がつかなかった。ごみが無いのではなく、いくらでもあったのです。ただ自分に見つける力がたりなかったからでした。心さえしっかりさせてやれば、掃除はいつまでも続けてやれるものだ」と教えられました。「こんな隅々の汚れまできがついてきれいになっていくとは驚きだ。しみじみこのよさを感じさせられた」

「毎日の掃除の時間が待ち遠しい。働くってこんなに楽しいことだったのか」などと述べています。

(次号へ続く)

成人式を迎えた生徒のふり返り

2015（平成27年）1月11日（日）白山市立光野中学校，平成22年度卒業生の成人式において，道徳的実践力を育成する手段として取り組んできた「自問清掃」。中学校を卒業し成人を迎えた生徒たちのこれまでの生き方にどのような影響を与えているのかを知りたいと思い，数名の卒業生に作文を書いてもらった。できることなら，成人式に参加していた卒業生全員に書いてもらえば，もっと詳しい資料として提示できたと思うのですが，当日の慌ただしい状況の中では出来ませんでした。

大学生3名，社会人1名の作文であるが，ここに書かれている内容を読んでもと，思春期に取り組んだ「自問清掃」は，卒業生の成長過程においても少なからず良い影響を与えていることが分かります。

大学生Aさん（男）のふり返りには，当時の自分の「生き方・考え方」が正直に書かれ本当に「思春期真っ盛り」であったことが分かります。しかし，「自問清掃」との出会いが彼の生き方を変え，人格形成に大きな影響を与えていったことは，明白な事実として書かれてあります。

このように「自問清掃」は，人の生き方や考え方に大きな影響を与え，人間としての表の部分の成長を助けていることが分かります。

社会人となったBさん（男）は，「自問清掃」を通して，「人の気持ちを考える。」ということが身についたと言っています。そのことで「気働き」ができるようになり，会社でも自然とそのような行いができるそうです。周囲との信頼関係がしっかり出来上がり，自分の仕事にも自信を持って取り組めると言っていました。

大学生のCさん（女）は，「自問清掃」を行ったことで，一日の自分の行動を振り返った生活習慣が，中学校を卒業して5年も経た今でも続いているそうです。

「思春期真っ盛り」の生徒に取り組んでもらった「自問清掃」。この取り組みは，中学校時代で終わりではない。ということが証明されたのではないかと思います。中学校を卒業してもなお，その精神は，一人ひとりの人間としての生き方にプラスの働きを継続しているのです。

私たちの取り組みは，地道な取り組みで，全国の小中学校に爆発的に取り入れられるものでもありません。むしろ，否定的に扱われる場合が多く，理解してくれる人も多くいるわけではありません。ここに集うみなさんは，子どもの成長を信じ実践されていくと思います。また，挑戦してみよう，勉強してみよう，と思って参加している方もおられると思います。「自問清掃」は今までの教師スタイルを「掃除の時間」だけ180度変換する取り組みです。ストレスが溜まります。取り組んだことがすぐに結果として現れるものでもありません。そのことを承知して取り組んでください。

これからも「自問清掃」を通して，子どもたちが将来出会うであろう様々な場面・状況においても，道徳的価値を実現するための適切な行為を主体的に選択し，実践することができるような内面的資質を成長させるために，頑張ってもらいたいと願っています。



【資料 1】

・成人を迎えた光野中卒業生の振り返り 「2015年(平成27)1月11日(日)」

さん(大学生)

自問清掃は、僕の人格形成に大きな影響を与えてくれました。決して大袈裟に言っているわけではありません。

当時、多くの中学生と同じように、僕もよく言う「思春期」真っ盛りでした。常に誰かクラスメイトと同調しながらグループのようなものに属し、周りから浮かないようにとばかり一生懸命。ルールを素直に守るのは何となくダサイ、そんな雰囲気はどこからとは分かりませんがあつという間に広がり、自分も何の疑問も抱かず同調していました。そのため、掃除の時間も大抵の人がサボりながらやっていたように、手を抜いたり、隅で座っていたりしていました。真面目にやるのはヘン、今思えばひどく反社会的な思考一色に染まっていました。

しかし、この清掃法の特長なところ、一つは誰もしゃべらないこと、また一つは掃除しないという選択肢が認められること、これらの効果はじわじわと現れてきました。一般的な学校の風景ならばおそらく、僕のような態度は先生に発見され次第咎められるでしょうが、自問清掃では全く、何も、干渉されません。最初、自問清掃に取り組み始めたばかりのころは、掃除が強制でないことを幸運と捉え嬉々としてサボりました。ただ、それがいくらか時が経つと、ふと周りに目がいききました。そこには黙々と掃除する先生と一部の生徒がいました。それでも、ああ偉いね、としか初めは思いませんでしたが、さらに時が経つと、だんだんと何もしていない自分が馬鹿らしくなってきました。我が身のことながらとても不思議なことだったので、印象に残っています。そして、ルールに反しようと

する気持ちは、ただ自らの存在の誇示、他人からの注目、承認への欲求の、やや歪曲して具現化したものなのだと、ある種客観的な視点からみえるようになっていました。そう分かった途端、とても自分が幼く感じられ、恥ずかしさとこれまでの行いへの贖罪を原動力に、気づくと掃除をしていました。

結局、みんなのために、や、校舎への恩返し、などの理想的な動機を得るまでには、卒業までには行きませんでした。やるべきことはやるべきだ、という、今でも思考の主軸の一つになっている要素を身に付けることができました。もっと早く、小学校のころからこれができるのであれば、と時々後悔することもあるほどに、自問清掃に感謝しています。

さん(社会人)

私は高校卒業後に就職し、一社会人として生活を送っています。そこで私は自問清掃を通して、人の気持ちを考えるということが身についたと思います。自問清掃ではしゃべることなく黙々と掃除をするわけですが、「あの人はここを掃除していたので違う所を綺麗にしたほうがいいな」など自分で考えて行動します。社会に出ると自分で考え行動することが当たり前になり、一番重要な部分になってきます。自問清掃を経験した私は、中学校時代の恩師に徐々に再会。先生がその当時、部活動で頑張っていた私の進路を共に真剣に考えてくれたおかげで今の自分がある。成人式の際には、数時間の成功の為に何十日もかけて準備してくださる運営の方々がいる。その人にとっては仕事であり、当たり前のことかもしれませんが、その思いに感謝できる自分に成長しているなと思います。中学校時代の自分はなぜ自問なんて？と思いました。自問清掃は日々の清掃を通して自分が成長できる場になっていたのだなと振り返ります。これか

らもその経験を生かして頑張っていきます。

Yさん(大学生)

私は光野中学校で三年間自問清掃を毎日行いました。最初は何のためにやるのだろうという疑問とおもしろそうだなという少しの期待がありました。1年目、2年目、3年目と行う中で、自問清掃以外での生活が自問清掃を行ったことによって変化していくのが実感できました。自分のことについて、自分の一日の行動を振り返ったりするようになり、「今日これができたから明日はもっとこうしよう」と考えるようになりました。これは、中学校を卒業して5年経った今でも変わりません。この行為をすることによって、自分の気持ちや心がとても落ち着き、また明日も頑張ろうという気持ちになることができます。中学校は小学校とは異なり、精神的に成人になろうとしている中でこの自問清掃に取り組むことができ、当時の先生方には心から感謝しています。

Hさん(大学生)

私は当時校長だった橋口先生から自問清掃についての話を聞いたとき、自問清掃がどういうものなのか正直ピンときませんでした。しかし続けていくうちに今の自分が何をすべきか、またどのような行動が適切かを瞬時に考え、そして他人への気遣いができる余裕が生まれました。そのため、集団行動の場で他人に指示される前に迷わずに行動するようになりました。また、私は自問清掃で毎日同じところを掃除しては面白くないため、たまに汚れや埃が溜まっているような場所を新たに探し出したりしていました。そういった探究心のおかげで何事も突き詰めていく力がつきました。このようにして、自問清掃は取り組んでいるときは気づきません

が後から考えるととても自分のためになっていると感じました。

20歳という人生の一つの節目を迎えた人たちに、中学校を卒業してからの5年間の生き方の中で思春期に取り組んだ自問清掃がどのような影響を与えていたのかを知りたかったこと、自分たちの取り組んだことが間違っていたのかどうかを確認したかったのです。わずか4名という少人数ではありますが、これから自問清掃に取り組んでいくひとたちの励みになればと思っています。もう少し多くの人たちの声を紹介できればよかったです。ここまでが精一杯でした。

私は書いてくれた人たちの作文を読みながら、自分たちがやってきたことは間違っていなかったと改めて確信しました。

全国的に道徳教育の充実が叫ばれている昨今、私たちが取り組んでいる自問清掃は、日々の教育の「扇の要」として、補充・深化・統合の場となりうる形を見事に具現化していると思います。

橋口先生より教師成長についての原稿も寄せていただいております。次号では、自問清掃に出会って成長していく教師の作文を中心に紹介します。

事務局便り

10月2日、3日の2日間、長野県塩尻市立塩尻中学校の文化祭（塩嶺祭）が行われました。その際に、予期しない出来事が起こったのです。塩尻中学校では、現2年生が昨年度の11月から心磨き清掃に取り組んでいますが、その成果なのか……。どうなのでしょう……。皆さんは、どう思われますか。その時のことを、学校だよりに掲載した記事がありますので、以下に紹介します。

自主的に取り組んだ朝清掃

実のところ、塩嶺祭の2日間、清掃の時間は一切予定されていませんでした。ところが、塩嶺祭前夜、暴風雨に見舞われました。翌朝、外階段、渡り廊下、ピロティーなどは落ち葉と水たまりで大変なことになっていました。でも、多

くの生徒たちが自主的に清掃に取り組み、お客様をお迎えする準備を整えてくれました。同様に、2日目の朝も朝早くから登校した生徒たちが自主的に清掃に取り組んでくれたのです。中には、玄関解錠前から鞆を背負ったまま清掃に取り組んでくれた生徒たちもいました。なんと素敵なお生徒たちなのでしょう。



こうして、生徒たちの自主性によって清掃が行われ、お客様をお迎えすることができた2日間の塩嶺祭でもありました。塩中の生徒たちを誇りに思う2日間でした。（事務局長：丸山博）

《編集後記》

1年ぶりの発行となりました。今回は、石川県の橋口先生より原稿を寄せていただき紹介させていただきました。今回橋口先生より寄せいただいた原稿は全てを掲載することができませんでした。次号で紹介する内容は、自問清掃に出会って変わっていく教師の感想を多く紹介されています。楽しみにしていただきたいと思えます。

私事ですが、この会で出会った先生から声をかけて頂き、2月に愛知県の学習会に招待いただき実践発表をさせていただきました。他県の先生方と交流することは、自己の教育実践力を高めていくために、欠かせない事だと考えています。このようなつながりをこれからも大切にしていきたいと思っています。

この会報は、日頃なかなか交流が難しい全国各地の先生方をつなぐ一助になるために発行され、今回で8号となりました。多くの先生方の実践の様子をお寄せいただき、今後もこの会報が充実し、そして、本物の教育を求める先生方が元気と勇気を持って実践していければよいなあと感じているところです。（文責：片岡）

訃報

平成二十八年一月二十日、かねてより病氣療養中でありました関明夫先生が、薬石効なく享年92歳で永眠されました。先生はご高齢にも関わらず、一昨年まで毎回欠かさずレポートを持参して自問教育の会に参加され、実践交流会ではふつと立ち上がったかと思ふと眼光鋭く「それで子どもたちは、どんな力がつくのですか?」などと本質を突く質問をされるなど、「どこからこれだけの情熱が湧いてこられるのだろう?」と疑問に思うほど教育に対する熱い思いにはいつも感服させられていました。ここに心から哀悼の意を表すとともに謹んでお知らせ申し上げます。